

聖人（親鸞）一流の御勸化の
 おもむきは、信心をもって本と
 せられ候ふ。そのゆゑは、もろ
 もろの雑行をなげすてて、一心
 に弥陀に帰命すれば、不可思議
 の願力として、仏のかたり往生
 は治定せしめたまふ。その位を
 「一念發起入正定聚」と釈し、
 そのうへの称名念仏は、如来わ
 が往生を定めたまひし御恩報尽
 の念仏とこころうべきなり。あ
 なしこ、あなかしこ。

末代無智の章

末代無智の在家止住の男女た
 らんともがらは、こころをひと
 つにて阿弥陀仏をふかくたのみ
 まゐらて、さらに余のかたへこ
 ころをふらず、一心一向に仏た
 すけたまへと申さん衆生をば、
 たとひ罪業は深重なりとも、か
 ならず弥陀如来すくひまします
 べし。これすなはち第十八の念
 仏往生の誓願のこころなり。か
 くのごとく決定してのうへに
 は、ねてもさめても、いのちの
 らんかぎりには、称名念仏すべき
 ものなり。あなかしこ、あなか
 しこ。

親鸞聖人によって開かれた浄土真宗でお勧めくださ
 る趣旨は、信心を根本とされています。
 そのわけは、さまざまな雑ぞうぎよう行をやめて、ただ一心に
 阿弥陀如来におまかせすると、心で思い言葉で尽くせ
 ない本願の力によって、仏の方から私たちの往生を定
 めてくださいます。

そのように往生の決まったことを曇鸞大師は「信の一
 念に、まちがいがいなく往生し成仏することを定まる
 正しょうじょうじゆ定聚の位に入る」と釈されています。そしてそ
 のうえでの称名念仏は、如来が私たちの往生を定めて
 くださった御恩を報謝する念仏と心得ねばなりません。
 まことに畏れ多く尊いことでもあります。

末代の世にあつてまことの智慧なき在家の生活をし
 ている人々は、男女とも、心をひとつにして阿弥陀仏
 を深くたよりにいたしましょう。

そして決してそれ以外の仏・菩薩や余行などに心を振
 り向けることなく、一心一向に阿弥陀仏におまかせす
 る人々を、たとえ罪は深く重くても、阿弥陀如来は必
 ずお救いくださるのです。これこそ第十八願に誓われ
 た念仏往生のこころなのです。

以上のように信心が決けつじよう定したうへは、寝ても醒さめ
 ても、いのちのある限りは、称名念仏すべきであります。
 あなかしこ、あなかしこ。

それ、人間の浮生ふしょうなる相をつらつら観ずるに、おほよそはかなきものはこの世の始中終、まぼろしのごとくなる一期いちじなり。さればいまだ万歳まんざいの人身にんじんをうけたりといふことをきかず、一生過ぎやすし。いまにいたりてた

れか百年の形体ぎょうたいをたもつべきや。われや先、人や先、今日ともしらず、明日ともしらず、おくれさきだつ人はもとのしづくすゑの露つゆよりもしげしといへす。

り。されば朝あしたは紅顔こうがんありて、夕ゆうべには白骨となる身なり。すでに無常の風きたぬれば、すなはちふたつのまなこたちまちに閉ち、ひとつの息ながくたえぬれば、紅顔こうがんむなしく変じて桃李とうりのよそほひを失うしなひぬるときは六親眷属ろくしんけんぞくあつまりてなげきかなしめども、さらにその甲斐かいあるべからず。さしてもあるべきこととならねばとて、野外げいにおくりて夜半よわの煙けぶりとなしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。あはれといふもなかなかおろなり。されば人間のはかなきことは老少不定ろうしょうふていのさかひなれば、たれの人ひともはやく後生ごせいの一大事いちだいじを心にかて、阿弥陀あみだをふかくたのみまゐらせて、念仏ねんぶつ申すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

【意 訳】

さて、人間の定まりない有様をよくよく考えてみますと、およそはかないものとは、この世の始めから終わりまで幻まぼろしのような生涯せいぎであります。だから、人が一万年生きたということ聞いたことがありません。一生は過ぎやすいものです。末世まごころの今では、いったい誰が百年間身体を保つことができましようか。

私が先か、人が先か、今日かもしれず、明日かもしれず、おくれたり、先立さきだちったり、人の別れに絶え間がないのは、草木の根本こんぽんにかかる雫しずくよりも、葉先はさきにやどる露つゆよりも数が多いと、いわれています。

だから、朝には血氣盛んな顔色であっても、夕方には白骨となってしまう身であります。現に無常の風が吹いて、二つの眼がたちまち閉じ、一つの息が永久に途切れてしまえば、血色のよい顔も色を失つて、桃ももや李なしのような美しいすがたをなくしてしまうのです。その時に、家族・親族が集まって嘆き悲しんでも、もはや何の甲斐かいもありません。

そのままにしておけないので、野辺の送りをし火葬すれば、夜半の煙けぶりとなつてしまい、ただ白骨が残るだけです。あわれという言葉だけではいい表し尽くすことができません。

人間のはかないことは、その寿命が老少定まりのない境界けいがいなのですから、どのような人も早く後生の一大事いちだいじを心にかけて、阿弥陀あみだを深くたのみにして、念仏ねんぶつするのがよいでしょう。

あなかしこ、あなかしこ。

信心獲得ぎやくとくすといふは第十八の願をこころうるなり。この願

をこころうるといふは、南無阿弥陀仏のすがたをこころうるな

り。このゆゑに南無と帰命する一念の処ほつがんにえこうに発願回向のこころあ

るべし。これすなはち弥陀如来の凡夫に回向しますすこころな

り。これを「大経」には「令諸衆生功德成就りようしようしゆじようくどくじようじゆ」と説

けり。されば無始以来つくりとつくる悪業煩惱を、のこるとこ

ろもく願力不思議をもつて消滅するいわれあるがゆゑに、正定

聚不退の位に住するとなり。これによりて「煩惱を断ぜずして

涅槃をう」といへるはこのこころなり。この義は当一途の所談

なるものなり。他流の人に対してかくのごとく沙汰さたあるからざ

るところなり。よくよくこころうべきものなり。あなかしこあ

なかしこ。

信心をいただくということは、第十八願のおこころを聞かせていただくことです。

この願を聞くといいことは、南無阿弥陀仏のいわれを聞かせていただくことです。

このゆゑに阿弥陀如来のおおせにまかせた一念のところに、発願回向のこころがあるのです。これは阿弥陀如来が凡夫を救わずにおれない、との願いをもつて、回向してくださるこころであります。

これを『無量寿経』には「令諸衆生功德成就りようしようしゆじようくどくじようじゆ（もろもろの衆生をして功德を成就せしむ）」と説かれています。

そこで、はるか昔よりつくり続けてきた悪業や煩惱をすべて残らず如来の願力の不思議なはたらきによつて消滅してくださる道理がありますので、

正定聚不退しやうじやうじゆふたいの位につくことになるのです。これによつて「煩惱を断つことなく涅槃をうる」というのは、この意味であります。このみ法は浄土真宗だけが説くところのものです。他宗派の人に対して語ったり論ずるべきではありません。よくよくこころえなければなりません。あなかしこ、あなかしこ。

それ、八万の法蔵をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとひ一文不知いちもんふちの尼入道なりといふとも、後世をしるを智者とすといへり。しかれば当流のころは、あながちにもろもろの聖教をよみ、ものをしるたりといふとも、一念の信心のいはれをしらざる人は、いたづらごとなりとしるべし。されば聖人の御ことばにも、「一切の男女たらん身は、弥陀の本願を信ぜずしては、ふつとたすかるといふことあるべからず」と仰せられたり。このゆゑにいかなる女人なりといふも、もろもろの雜行をすてて、一念に弥陀如来今度の後生たすけたまへとふかくたのみまうさん人は、十人も百人もみなともに弥陀の報土に往生すべきこと、さらさら疑うたがひあるべからざるものなり。あなかしこ、あなかしこ。

さて、釈尊の説かれた多種多様な教えを知りつくしていても、後生の一大事について心得がなければ、愚者といわねばなりません。一方、文字も読めず、在家生活のままに仏門に入った女性や男性であっても、後生の一大事について心得ていれば、智者というのである、といわれています。ですから浄土真宗のころでは、ことさらに多くの聖しやうぎやう教きやうを読んでもの知りになっても、一念の信心のいわれがわからないでは、むなしいだと思ってください。

そこで、親鸞聖人のお言葉にも、「すべての男性も女性も、阿弥陀如来の本願を信じなければ、まったくたすかるといふことはありません」と仰せになっています。

ですから、どのような女性でも、いろいろな雜ぞうぎやう行ぎやうを捨てて一念に、阿弥陀如来を、このたび来るべき後生のおたすけまちがいなしと、たより信じたならば、十人は、十人、百人は百人とも、みな必ず阿弥陀如来の浄土へ往生できるのです。そのことを決して疑ってはなりません。

あなかしこ、あなかしこ。

そもそも、この御正忌ごしょうきのうち
に参詣さんぎいたし、こころざしをは
こび、報恩謝徳をなさんとおも
ひて、聖人の御まへにまゐらん
ひとのなかにおいて、信心しんじんを獲得かくとく
せしめたるひともあるべし、ま
た不信心ふしんじんのともがあるべし。
もつてのほかの大事なり。その
ゆゑは、信心しんじんを決定けつじょうせずは今度
の報土の往生は不定なり。され
ば不信のひともすみやかに決定
のこころをとるべし。人間は不
定のさかひなり。極楽は常住の
国なり。されば不定の人間にあ
らんよりも、常住の極楽をねが
ふべきものなり。されば当流に
は信心のかたをもつて先とせら
れたるそのゆゑをよくしらずは、
いたづらごとなり。いそぎて安
心決定して、浄土の往生ねがふ
べきなり。それ人間に流布りゅうぷして
みな人のこころえたとほりは、
なんの分別もなく口にただ称名
ばかりをとなへたらば、極楽に
往生すべきやうにおもへり。そ
れはおほきにおぼつかなき次第
なり。他力の信心をとるといふ
も、別のことにあらず。南無阿
弥陀仏の六つの字のこころをよ
くしりたるをもつて、信心決定
すといふなり。そもそも信心の
体といふは、「経」にいはいはく、

さて、この御正忌ごしょうきにこころざしをもつて参詣さんぎし、
報恩謝徳をあらわそうと思つて、親鸞聖人のご真影
の前におまいりする人々の中には、信心をすでに得
た人もあるでしょう。また不信心ふしんじんの人もあるでしよ
う。これは何よりも大事なことです。

というのは信心を決定しなければ、このたびの極
楽浄土への往生はできないからです。

ですから、不信心ふしんじんの人もすみやかに決定の信心を
もつべきです。

人間界は、なにごととも定まりのない世界です。

極楽浄土は永遠に変わることのない国でありま
す。ですから、定まりのない人間界にいるよりも、
変わることはない極楽浄土に生まれることを願うべ
きなのです。

そこで、浄土真宗において信心を本としているそ
のわけをよく知らなければ、むなしく、無益なこと
になります。急いで安心を決定し、浄土往生を願
わなければなりません。

ところが、世間で、広く人々が思い込んでいるこ
とは、本願名号のいわれを正しく聞きひらかずに、
口でただ称名さえとなえていけば、極楽に往生でき
る、ということですが。これはまったく不確かなこと
なのです。

他力の信心を得るというのも、特別のことではあ
りません。南無阿弥陀仏の六字の意味を疑いなく領
解すること、信心が決定するというのです。

いったい、信心の本質のついては、『無量寿経』
巻下に「聞其名号 信心歡喜」もんごみょうごう しんじんかんぎ（その名号を聞きて
信心歡喜せん）と言われています。

善導大師は「南無というは帰命、またこれ発願回
向の義なり。阿弥陀仏といふはすなはちその行」

『観経疏』かんぎょうしよ「玄義分」げんぎぶんと言われています。

「聞其名号信心歡喜」といへり。善導のいはく、「南無といふは歸命、またこれ発願ほつがん回向の義なり。阿弥陀仏といふはすなはちその行」といへり。「南無」という二字のころは、もろもろの雜行をすてて、疑いなく一心一向に阿弥陀仏をたのみたてまつるころなり。さて「阿弥陀仏」といふ四つの字のころは、一心に弥陀を歸命する衆生を、やうもなくたすけたまへるいはれが、すなはち阿弥陀仏の四つの字のころなり。されば南無阿弥陀仏の体をかくのごとくころえわけたるを、信心をとるとはいふなり。これすなはち他力の信心をよくころえたる念仏の行者とは申すなり。あなかしこ、あなかしこ。

「南無」という二字の意味は、さまざまな雜行を捨て、疑うことなく、ひたすら、阿弥陀仏を信じ申し上げるころを言います。それから「阿弥陀仏」という四字の意味は、一心に弥陀の教えにしたがう衆生をやすやすとおたすけくださる、そのわけが、阿弥陀仏の四字の意味です。ですから、南無阿弥陀仏のすがたをこのように領解するのを、信心を得るといふのです。これをすなわち、他力の信心をよくころえたる念仏の行者というのです。あなかしこ、あなかしこ。